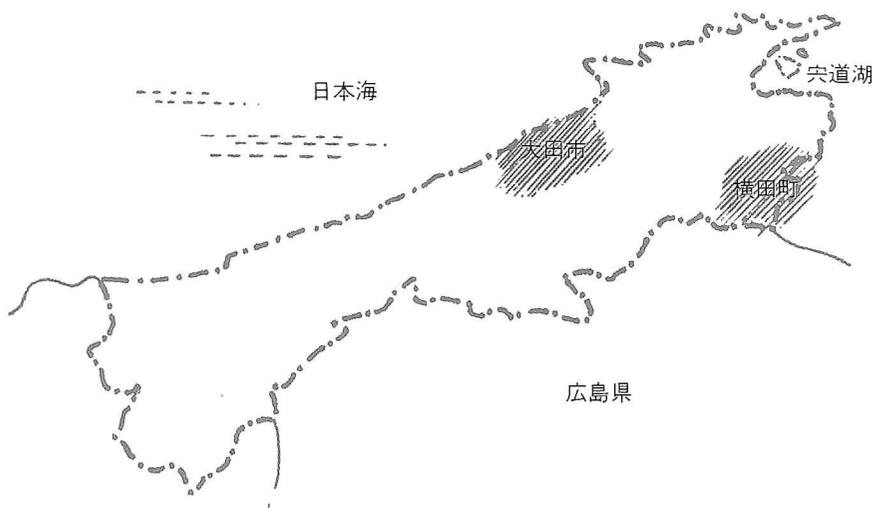


島根県 大田市、横田町

寺院の合併、移転に 活路を見出す



《島根県の概観と経済》県の総面積の七一%が過疎指定地域。

古来より出雲を中心に豊かな文化をもってきた島根県は、自然条件が整い、農林水産業を中心として自給自足の自然経済で成り立ってきた。

しかし、昭和三〇年以降、高度経済成長政策によって産業の中心が農林業から工業へ移り、地理的制約もあって、第二次・第三次産業の進展が他県に比べると決定的に立ちおくれしてしまった。

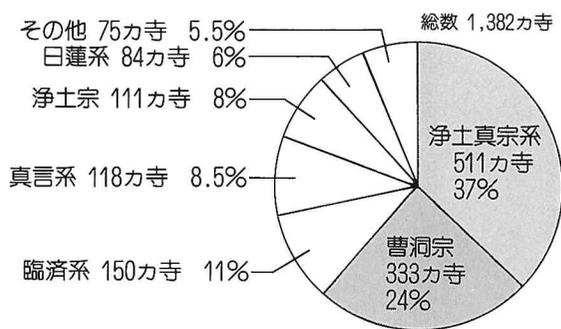
その結果、農山村から都市部への人口流出が著しくなり、現在、県の総面積の七一%が過疎指定地域となっている。人口は八〇万人を割り、鳥取県につぐ人口の少ない県となっている。

《島根県の寺院の状況》百・百五十・二百・二百五十回忌の先祖供養を行う風習。

寺院の状況をみると、島根県には一、三、八の寺院があり、浄土系と禅宗系で全体の八割を占め、日蓮系は八四カ寺で、一割にもみたくない(図表1)。

日蓮宗の寺院は六七カ寺で、『日蓮宗寺院

図表1 島根県寺院宗派別比率



図表2 横田町・大田市における人口の変化

	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年
横田町	12,788	11,268	9,958	9,243	9,096
大田市	47,211	42,322	38,192	37,449	38,026

(単位:人)

名簿』によると、その中の五九カ寺が住職寺で、代務寺五カ寺、無住職寺院が三カ寺となっている。しかし今回調査してみても無住の寺院が一三カ寺、寺院名のみで、廃寺同然の寺院が二カ寺あることがわかった。また、全体の四割強が後継者難を訴えており、この問題も深刻なものといえる。

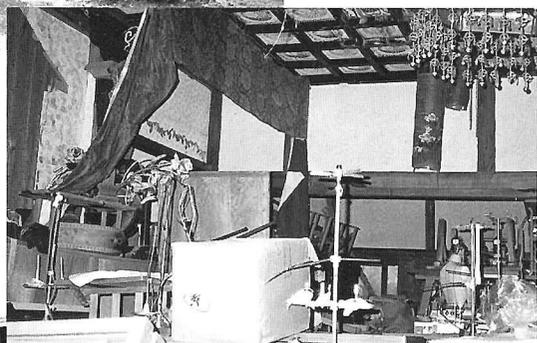
この地方には全体にわたって、独特の風習がある。それは、昔の地主と小作との地縁関係が今でも残っていて、村に一人いるかないかの大地主(昔ながらの名士であるが)これを檀さん(檀那さん)、その妻を奥さんと呼び、普通の地主を親方、その妻をおっかさん、小作人をおっさん、その妻をおばさんと呼ぶ。このような習わしは、今なお日常生活に生きており、間違えるとは大変である。葬儀・法事・戒名授与なども、たとえその家が没落していても、昔ながらの家の格で執り行われるという。また、何事でも家柄を重んじ、今日でも百・百五十・二百・二百五十回忌の先祖供養がなされる風習が残っている。県外から入寺したある住職は、馴れるのに一〇年かかったという。

《農村地域の過疎と寺院・横田町の五カ寺》
 学稼離村で檀家が減少、寺院の修繕の費用も住職が出す。

仁多郡横田町は、中国山地のほぼ中央に位置し、山林原野が総面積の八四%を占め農耕地は九%ほどの、冬の間は雪の多い地域である。昔から、米や牛を産出する農業を基幹としてきた町だが、現在では専業農家は著しく減少し、兼業農家になる傾向にある。かつては鋳製鉄や算盤製造の町として栄えてきたが、今日ではその生産も減少ぎみにあるという。現在では縫製工場が誘



大水害により、本堂は土砂に埋まったままの寺



倉庫になっている本堂



荒廃した本堂の状況

致されるなど、第二次産業がのびている。人口は、現在では九千人台に定着しているが(図表2)、若年層の流出により老人世帯が残されるケースが多い。

この地域には一七カ寺の寺院があり、日蓮宗寺院は五カ寺である。五カ寺のうち四カ寺は住職常住の寺院で、一カ寺が無住寺院。檀家数は、少ない寺院で二十数戸、多い寺院で百五十戸である。

布施収入のみではなかなか寺院の護持は難しく、住職か住職夫人が教職にいたり内職をしたり、年金を受けながら寺院を護持し、寺院の修繕の費用も住職個人のお金

でまかっている状況である。

特に檀家数の少ない寺院は、挙家離村で檀家はさらに減少し、残された老人世帯の檀家を見ると、今後の寺院維持の大変さが伺われる。

横田町の日蓮宗寺院の状況を見ると、町の人口の動態がいまのところは定着する傾向をみせている。しかし、どの寺院も後継者難に悩んでおり、今後の見通しは憂うるものがある。

《銀山の衰退による急激な過疎と寺院》過疎地となり寺院が次々移転・合併し、残つ

た寺院は廃寺同然となる。

調査では大田地区、特に大森石見銀山を中心に回った。

大田市の人口は、昭和三五年には約四万七千人あった。しかし、昭和四五年には四万人を割ってしまい、現在は横ばい状態である(図表2)。

農村部は過疎のため、人口流出が著しく全人口の二〇%強は、大田市街地に集中している。

大田市の全寺院一三五カ寺のうち約六割は真宗寺院で、いわゆる「石見門徒」と呼ばれる所である。

かつて銀山で栄えた大森町は、現在は人口激減地区である。石見銀山は、鎌倉時代末期に発見され、江戸時代には人口二〇万人といわれていたが現在の人口は六二一人に激減した。

盛んな頃には、銀山の狭い区域に九〇カ寺あまりの寺院が建立されていたというが、町の衰退とともに寺院の移転合併が行われ、現在は一四カ寺が残っている。日蓮宗の寺院もかつては八カ寺建立されていたようだが、現在は三カ寺となっている。

銀山が衰退して人口が流出し、集落が衰退する。地域社会の変動によって寺院も動かざるを得ない状態に追いこまれ、寺院の移転、合併を招いたのである。

そして、そこに残った寺院は今、廃寺同然に追いこまれている。

現在銀山に残る三カ寺のうち、住職常住寺は一カ寺である。その寺院は明治の始め頃八〇戸あった檀家が今は二〇戸となり、寺院護持は困難で、将来の見通しは暗い。

他は、檀家三戸の無住の代務寺と、大水害により土砂に埋まり宝塔のみ残っている寺

院である。銀山に残った寺院とは別に、他の地区に移転した寺院が四カ寺ある。県内に移転したある寺院は、移転した先も過疎となり、今は縫製会社の倉庫となっている。

これに比べ、県内の平田市に移転した寺院と埼玉県に移転した寺院は、いづれも再興され、現在教化の拠点となっている。移転先もよく考えて移転しなければならぬことを教えてくれている。本堂がなくなったり朽ちている姿はあまりにも無惨である。

石見銀山の調査では、寺院の移転ということで、移転先を選ぶことの大切さ、時には寺院も人の動きの変化に応じて動かなければならないことを教えられた。

《まとめ》

寺院の存続は、地域社会の変動に大きく関わっている。

今回の調査で、次の四点が考えられる。

- ①檀家があっても、住職の常住しない寺院は廃寺に至る可能性があること。
- ②今まで寺院をささえてきた檀家制は、寺院の存続において必ずしも絶対的ではない、それは過疎農山村地域で顕著になりつつあること。
- ③今日の寺院は、檀家制云々以前に、社会の変動や人の動きに、はっきりと左右される位置にあること。
- ④廃寺寸前までできながら、おれ達の寺だといって移転や合併を執拗に拒んでいると、結局廃寺同然に至り、ひいては寺院の崩壊を招かざるを得ない状態になってしまうこと。

などが改めて知らされた。